

## 新教育課程の着実な実施に向けて

県教育庁教育振興部学習指導課 指導主事 石渡 健三

新学習指導要領に基づく教育課程が、令和4年度新入生から本格的に始まりました。各校におかれましては、その実施に向けて様々な準備の下、令和4年度を迎えられたことと思います。1学期あるいは前期の授業や評価をよく総括・検証していただき、今後に向けての改善点等を明らかにし、着実な学習指導要領の実施に向けて引き続き取り組んでいただきますようお願いいたします。

さて、新学習指導要領では、改訂の基本方針の1つとして、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が挙げられています。

この「主体的・対話的で深い学び」とは、特定の型や授業形態を指すのではなく、「授業改善の視点」です。すなわち、「主体的・対話的な授業とは、どのような授業か」という考え方ではなく、授業の中で生徒たちが「主体的に取り組める場面はないか」、あるいは、生徒たちの「対話的な学びを生かせる場面はないか」といった考え方を持って自らの授業を見直し、深い学びを目指していただきたいということです。これは同時に、「教師が本当に教えなければならないこと」を整理することにもなります。この内容の整理は、各単元における評価規準を明確化することにも繋がり、観点別学習状況評価の運用の更なる円滑化も期待できます。

深い学びを目指すためには「数学的活動」も重要です。新学習指導要領解説では、「数学的活動とは、事象を数理的に捉え、数学の問題を見だし、問題を自立的、協働的に解決する過程を遂行すること」とあります。探究では、問題（problem）は初めから存在するものではなく、それを認識・設定することによって初めて生まれるものとされています。そして、問題の解決のために、取り組むべき内容を具体化したものが課題（task）です。生徒たちが真の探究活動を経験するには、教師から与えられた問題や課題に取り組むだけでなく、生徒自身が問題を認識し、解決のために取り組むべき課題を設定する必要があります。現実世界の事象や教科横断的な内容も取り上げながら、生徒自身が数学の問題を見出す活動をする場面や、自立的、協働的に問題を解決する場면을効果的に設定していただくようお願いいたします。

また、今回の学習指導要領の改訂で、高等学校における課題として挙げられたものが「指導と評価の一体化」です。学習評価は、「教師が指導の改善を図るとともに、生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするためもの」です。そして、生徒の学習状況を的確かつ分析的に捉えるからこそ、教師は生徒の実態に応じた指導の改善を図ることができます。一方、的確かつ分析的な評価が生徒にフィードバックされることで、生徒は評価を学習活動の改善へと繋げることができます。観点別学習状況評価では、総括の仕方やABCの評価方法が注目されがちですが、評価のもつ本来の意味を考え、「指導と評価の一体化」を目指していただきますようお願いいたします。

結びに、数学部会の事務局及び会員の皆様による、数学教育の改善・充実にに向けた熱意ある取組に感謝するとともに、数学部会誌「 $\alpha - \omega$ 」が一層充実・発展し、今後とも多くの先生方の研修の一助となり、日々の実践に活用されることを祈念しております。